心の声

氏名：人長亮太（ひとおさりょうた）

1_人長亮太写真

所属：福知山市消防本部
出身：京都市

消防士拝命：平成１５年

救急救命士合格：平成１５年
趣味：家族サービス

はじめに
はじめまして、私は民間養成救命士養成所を卒業し、消防職員に就職して間もなく１０年が経とうとします。そんな時、救命士養成所時代の同期である天野忠好さんから「１０年の節目に全国へメッセージを発信しないか。」と話がありました。この記事で今から消防職員を目指す方、救急救命士として現場で活躍している方に少しでも心に残ってもらえれば幸いです。

心の声が聞こえた

「ねぇ。お母さん。お父さんが苦しんでるんだけど・・・。」

私が８歳の時でした。夜中の２時位だったと思いますが、私が母親にそんなことを突然伝えたそうです。私の父は、母や私とは普段から別々の部屋で寝ていたので、父の苦しんでいる様子など気付くはずもありません。
私の言葉を聞いて不思議に思った母は、父の様子を見に行きました。すると父は布団から起き上がって「助けてくれ・・・苦しい。」とうめき声のような言葉を出し、汗をびっしょりかいて苦しんでおり、それはもう一刻を争う状態だったそうです。すぐに母は大慌てで救急車を呼び、落ち着かない様子で家の中を右往左往しながら、父の背中をさすったり、時に励ましたりしていました。
その後父は、救急隊員に処置をされながら病院へと運ばれていき、事なきを得ました。そんな我が家の一大事以降、私は母から、「あの時のおまえの一言がなかったら、お父さんはこの世にいなかった。おまえがお父さんを助けたんだよ。」と事あるごとに言われ続けるようになりました。

父を助けに来て下さった救急隊の方々のことは今でもはっきりと覚えています。ちょうど「救急救命士」という資格ができた時であり、メディアでもよく取り上げられていたこともあるのかもしれません。小学校を卒業して中学生、高校生となっても、あの時の救急隊の活躍は常に私の脳裏に住み着いており、救急車や消防車のサイレンが聞こえると、自然と目がサイレンの方向へ向いていました。またこれも運命かも知れませんが、交通事故現場に居合わせることが度々あり、その活躍する消防士を見て、私の消防職員への夢がどんどん膨らんでいったのです。

神戸医療福祉専門学校入校

高校３年生になり、毎日野球漬けの私にとうとう進路を決める時がやってきました。「消防士になりたい」という気持ちに変わりはありませんでしたが、具体的にどこの消防本部を受けようとは決めていませんでした。そんな時、ある雑誌に「救急救命士」という言葉を見つけました。その言葉を見た瞬間、私は父を助けてくれた救急隊の姿が鮮やかに思い出されました。「これだ！」と思い、学校がどこにあるかもわからないまま親に伝えたことを今でも覚えています。調べていくと近畿に１校しかないことが分かり、家からは電車を乗り継ぎ２時間はかかるところでした。その学校が兵庫県三田市にある神戸医療福祉専門学校です（写真2）。

学校に入校してみると近畿から来ている生徒は全体の半分以下だったので驚きました。中国地方、九州地方、東北地方と様々でしたが、みんなそれぞれの理由で消防職員になるという夢をもっていて一生懸命勉強に励んでいました。くじけそうになっても同じ目標を

もった仲間がいたからこそ２年間前向きに頑張れたと思います。

消防士１年目

　学校を卒業し１年後、念願の消防職員に合格することができました。それは今私が勤務している福知山市消防本部です。

　ここで福知山市消防本部について紹介したいと思います。福知山市は京都府北部に位置しており、人口約８万人を管轄している大変緑豊かな町です。１署２分署で各署２台ずつ、合計６台の救急車があります。年間の救急件数は平成２３年で３，５５９件です。

【福知山市消防本部】

2_ 2_消防署㈪. jpg

　平成１５年に採用され今年で９年が経ちます。当本部に現在民間養成救命士は１１名いますが私が採用されたときは僅か１名でした。私の消防本部では初任科修了後約２ヶ月は研修期間であり、救急車に４名乗車で現場に向かっていました。
現場はやはり学校でのシミュレーションとは違い何もできず先輩の活動を見ているだけでした。学校ではそれぞれ隊員の役割がはっきりしており、それがパターン化されていました。当然現場はそうはいきません。現場でバイタル測定や処置をする場合、傷病者の状況から搬送を優先する場合など、臨機応変に対応する必要があります。ある先輩隊員は、隊長の指示がなくとも傷病者の搬送では病態に応じた体位を考え搬送準備をしています（写真3）。また窒息事案で、隊長が頭元に入ると自然と喉頭鏡、吸引器が準備してあります。「いつの間に・・・」常にそういう現場でした。３人の連携がすばらしく、私が入る隙はありませんでした。私がしていたことはというと傷病者の方に声をかけていたことくらいでした。「２ヶ月後、この３人に私は入れるのだろうか」と不安で仮眠もとることができなかったことを覚えています。

【救急出動時の様子】

3_出動前㈫. jpg

自己満足

２ヶ月はあっという間に経過し救急隊員として活動する時がやってきました（写真4）。ある交通事故現場でした。３０歳代男性、バイクでの単独事故です。全身観察をしてみると右上腹部に打撲痕を認めました。「ショックの原因はこれだ！」と思い医療機関に情報提供し、搬送しました。病院での診断結果は案の定、肝損傷でした。搬送を終え、帰りの救急車の中で隊長から、「外傷プロトコールに基づきしっかり傷病者を診ることができていた」と初めて褒められました。また、ある現場で救急隊長は私を現場に先行させ、私は傷病者を観察します。その帰りの救急車の中で、隊長は「今の傷病者の腹痛は何やったんや？」なんて私に聞いてくれます。救急車の中では私のミニ講義が開催されるわけですが、先輩に偉そうに説明するのはなんとも言えない優越感です。いつしかそんな出動に満足し、現場に行くことが楽しみで仕方なかったことを覚えています。

【救急シミュレーションの様子】

4_ＣＰＡシュミレーション㈬. jpg

聞こえなくなった心の声
月日は過ぎ約半年経過したときのことでした。今まで救急隊長は先輩救命士でしたが、救命士ではない救急隊長と一緒に出動することがありました。当然同じように現場経験を踏んでいる先輩、救命士の資格がなくとも素晴らしい現場活動でした。しかしどこか私の中で「隊の中で救命士は自分だけ。傷病者を診るのは僕」なんてことを思っていたかもしれません。

ある現場での出来事でした。腹痛を訴えていた７０歳代の男性です。現場到着し、

「どのあたりが痛みますか？」
「痛みは動きますか？」
「痛みほどのくらい続きますか？」
などセオリー通りの質問をします。傷病者は質問に答え、私の中で原因をある程度判断します。そんな普段通りの現場でした。

そんな時、ふと傷病者の顔の方に目をやると、隊長が傷病者の汗を拭いている姿がありました。顔を流れる汗が何度も目に入って辛そうでした。その度に先輩は傷病者の汗を拭き取り、「寒くないですか？」「車の揺れで気分悪くないですか？」と話かけていました。そして傷病者は、先輩に「ありがとう」と言ったのです。

一番初めに傷病者の顔を見たのは私です。一番初めに話しかけたのも私ですし、一番始めに体に触れたのも私です。なのに何で気付いてあげられなかったのか。その時の私は一番大事なことを忘れていたのです。傷病者の病因のことばかりを考えていて、傷病者を「診る」ことに重きを置き、「見る」ことができていませんでした。そんな自分をとても情けなく感じました。

小学校の頃の私は、医学知識もありませんし応急手当も知りませんでした。でも、苦しがる父の「心の叫び」が確かに聞こえていたのです。母にも兄弟にも聞こえない「助けてくれ・・・苦しい。」という心の声が、小学生の私には確かに聞こえていたのです。
しかし、救急救命士という資格を得て、救急現場に出ていた私には、いつの間にかその声が聞こえなくなっていました。とおり一辺倒の質問や観察ばかりして、傷病者の気持ちを分かってあげることが出来なくなっていたのです。

そのことがあってから私はもう一度自分自身の活動を見つめ直しました。その時改めて救急においてこのような基本的なことが全くできていない自分に悔しさを通り越し情けなく思えてきました。
「初任科卒業後４人目で研修として乗っていた時は傷病者に対してろくに観察もできず、ただ、ただ傷病者の不安を解消してあげようとしか考えていなかったのに・・・」
「なぜこのような簡単なことが出来なくなってしまったのだろうか・・・」

そう思う毎日でした。そんな時・・・

救急救命士追加講習での出来事でした。ある所属の救命士が気管挿管の実習中（写真5）、手技が終了し気管チューブの抜管時に訓練人形の顔を横に向け抜管していました。
「なぜ横に向けるのだろう。訓練は終わっているのに・・・」
思い切って聞きました。すると、

「普段から気管チューブ抜く時何を気を付ける？背臥位のまま抜いて嘔吐したらどうするねん！」

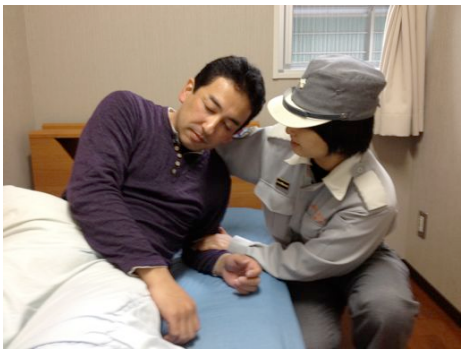
思ってもいない回答でした。しかし今思えば当たり前のことかもしれません。訓練人形を実際の傷病者と変わらない対応、分かっていたつもりでしたが出来ていないことに初めて気付かされました。
「これだ!!」

衝撃が走ったのを今でも忘れられません。私に足りていなかったことです。訓練の時から傷病者の言葉を聞こうとしていませんでした。

【常に現場をイメージした訓練が重要です】

5_気管挿管.jpg

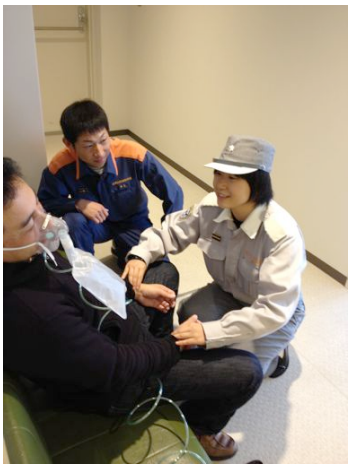
「それでは現場で出来るわけがない。」
それからというものの、マニュアル化された救急活動訓練でも傷病者が「求めていること」を意識し訓練に取組みました。手技を主眼においた訓練でも傷病者を第一に考えられるよう取組みました。現場では、救急隊長の活動を見てどのように傷病者に接しているか、特に目線を見るようにしました。ある救急隊長はただ病態を見つけるだけではなく、傷病者の顔色の変化に気付き言葉掛けをしました。それにより「言い出しにくいこと」を傷病者から引き出し、なんと、傷病者の青白い顔が赤みがかってきました（写真６）。その時言葉掛けで傷病者の状態が変化したことに感動しました。このように訓練や現場で意識することで「基本的なこと」がやっと身についてきました。



【言葉掛けだけ傷病者の状態が変化します】

6_現場㈰. jpg

私は今、傷病者が「求めていること」（写真７）を理解し「痛みの軽減」に付け加え「不安の解消」も出来る市民サービスを日々追求しています。私が父の声を聞いたのは、私が父を心から尊敬しており、父の体を本当に心配していたからに他なりません。救急隊員が本当に傷病者の立場になり、気持ちを理解しようとすれば、必ず「心の声」が聞こえるはずです（写真８）。それは救急現場だけではなく火災、救助現場も同様です（写真９）。どんなに医療に関する知識を身につけても「相手の立場になる」という基礎ができていいなければ、より良い活動は絶対にできません。



【傷病者が求めていることは何ですか？】

7_現場㈪. jpg

【気持ちを理解しようとすれば必ず「心の声」が聞こえるはずです】

8_現場㈫. jpg

【「心の声」は救急現場だけではなく火災・救助現場も同様です】

9_ＰＡ連携㈭. jpg

情報交換

　在職９年目になり、先輩に連れられて、ＪＰＴＥＣなど職種に関係なく医療に携わる方が集まって行う勉強会などに参加する機会が多くなりました。最近では全国の救助隊員が集まる「瓦礫救助」にも参加しています（写真１０）。初めは自分自身のスキルアップのため参加していたところがありました。しかし、色々な方と意見交換しているうちに皆さんの熱い気持ちが、私を刺激してくれました。ある所属の救助隊員の方が「消防に大規模も小規模もない。市民へのサービスは全国一緒でなければならない。」と言われたことがあります。私の所属は兼任で、救急はもちろん、火災、救助現場にも行きます。救命士だからといって救急だけの勉強をするわけにはいけません。その救助隊員の方の一言が今の

私を奮い立たせてくれます。その方は専任救助隊員で活躍されており、所属での訓練内容や、現場活動など色々と情報交換しています。初任科卒業後から取り組んでいる救助訓練では素晴らしい仲間と一緒に全国大会目指し汗を流しています（写真１１）。そういった場でも他の所属の方と知り合いになる機会が多くなりました。

【瓦礫救助】

10_瓦礫㈮. jpg

【救助大会】

11_障害突破㈯. jpg

主役は誰だ？

民間養成救命士は、消防学校卒業後すぐ救急出動すると思います。一つ言えることは救命士である前に一消防職員です。救急医療についての知識があるからといって救急活動ができるわけではありません。救命士活動は「応用」であり、「基礎」ができていなければ「応用」はできません。これが民間養成救命士と現任で養成された救命士との違いだと感じます。現任で養成された救命士の方は、消防職員としての「基礎」を身につけ救命活動という「応用」を学び、現場に活かせることができます。しかし民間養成救命士は、「応用」

を学び、その後「基礎」を身につけなければならないのでうまくいくはずがありません。それを解決する方法は１年目からしっかり消防どの分野に関しても積極的に勉強することだと思います。それは民間養成救命士の大きな壁であると思いますが、消防職員としてなによりも謙虚になるべきです。厳しい言い方になるかもしれませんが「救急」に逃げてはいけません。経験に勝るものはありません。自分一人では何もできません。先輩のいいところを盗み、自分のものにする。それを更により良くする。それを繰り返すことで最良の市民サービスができます（写真１２）。

【救急フェスティバル】

12_救急フェスティバ　ル㈮. jpg

　今後も市民が「主役」であること（写真１３）を忘れずに日々努力していきたいと思います。これから救命士を目指す方、民間養成救命士として活躍しておられる全国の方々、一緒に頑張りましょう。

皆さんは「心の声」聞こえていますか？

【救急講習の様子】

13_救急講習㈷. jpg